

幼稚園における子育て相談のあり方に関する考察

—別府市内幼稚園の保護者に対する質問紙調査から—

佐藤 慶子¹⁾ 阿部 敬信¹⁾ 菊池香奈恵²⁾

A Consideration about the Child-Care Counseling in Kindergartens: From a Questionnaire Survey to Parents on Kindergartens in Beppu-city

Keiko SATO Takanobu ABE Kanae KIKUCHI

【要 旨】

本研究は、これからの幼稚園における子育て相談のあり方を明らかにすることを目的として行われた。そのために、菊池が行った別府市内幼稚園の保護者に対しての子育て支援に関する質問紙調査からの結果を再分析するとともに、佐藤らが行った大分県内の幼稚園の子育て支援に関する実態調査の結果から考察を行った。

その結果、今後の幼稚園における子育て相談のあり方として、次の2点を指摘した。

一つめは、子どもの日常の姿を中心にして、幼稚園での具体的な保育を、保護者が分かるように知らせることが基本となるということである。

二つめは、「相談専門家」とともに行う子育て相談が必要ということである。

【キーワード】

幼稚園 子育て相談 非相談専門家

1. はじめに

近年、都市化、核家族化、少子化、情報化などの社会状況が変化する中で、子どもにどのようなかかわっていけばよいのか悩んだり、孤立感を募らせたりする保護者の増加などといった様々な状況が指摘されている。このような保護者の子育てに対する不安やストレスを解消し、その喜びや生きがいを取り戻して、子どものよ

りよい育ちを実現する方向となるよう子育ての支援を行うことが求められている¹⁾。

厚生労働省では、少子化は一層進行するとの予測を踏まえ、従来の取組に加え、もう一段の少子化対策が必要との認識に立ち、関係省庁の協力を得ながら、2002年9月に「少子化対策プラスワン」を取りまとめ、「男性を含めた働き方の見直し」や「地域における子育て支援」といった新たな観点からの施策を盛り込んだ。

文部科学省では、2001年に「幼児教育振興プ

¹⁾ 別府大学短期大学部

²⁾ 川島幼稚園（宮崎県延岡市）

プログラム」を策定し、その基本的考え方の中に「幼稚園の基本を生かす中で幼稚園運営の弾力化を図り、地域の幼児教育のセンターとしての子育て支援機能を活用して「親と子の育ちの場」としての幼稚園の役割や機能を充実する」ことを盛り込んだ。さらに、2006年には、「幼児教育振興アクションプログラム」を策定し、その基本的考え方において「幼稚園が「親と子の育ちの場」としての役割を担い、子育て支援機能等を充実させることにより、家庭や地域社会の教育力の再生・向上を図る」とし、「幼稚園が「地域の幼児教育のセンター」としての役割を果たすよう、当該園児のみならず、地域の幼児及びその保護者を対象とする子育て支援活動を推進する」と目標を掲げている。

このような状況を踏まえ、2008年3月の幼稚園教育要領改訂では「幼稚園の運営に当たっては、子育ての支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること」として、幼稚園の地域における幼児教育のセンターとしての役割を例示により具体的に示した²⁾。

このように、今の幼稚園は在園児のみの教育を司るのではなく、「親と子が共に育つ」という観点から積極的に地域における子育て支援を行うことで、幼児教育のセンターとして役割を果たすことが求められる状況になっている。

さらに、子育て支援に係る国の動向としては、内閣府の少子化社会対策会議により、幼保一体化を含む新たな次世代育成支援のための包括的・一元的なシステムの構築について検討を行うため、2010年には「子ども・子育て新システム検討会議」が設置され、「子ども・子育て新システムの基本制度案要綱」に基づいた、子ども・子育て新システムの基本制度、幼保一体化、こども指針（仮称）について議論が行われた。これは、2012年6月のいわゆる「社会保

障・税の一体改革」における「3党合意」によって、結局のところ「総合こども園」構想は破棄され、「幼保連携型認定こども園」の改善・拡充、子ども・子育て支援会議に置き換わることになった。しかしながら、「3党合意」によっても、「子育てに孤立感・負担感を感じている保護者が多いこと等を踏まえ、すべての子ども・子育て家庭に、それぞれの子どもの家庭の状況に応じ、子育ての充実感が得られるような親子の交流の場づくり、子育て相談や情報提供、親子登園などの支援を行う」という基本路線については変更なく、子育て支援の充実の必要性はますます大きくなっているところである。

このような状況を踏まえ、佐藤・阿部・高濱³⁾は、大分県の幼稚園における子育て支援の実態を明らかにすることを目的として、大分県内の公立、私立及び国立大学法人附属幼稚園203園に地域に対する子育て支援に係る質問紙を作成・配付し、郵送による回答を求める調査を行った。

質問紙は、「① 預かり保育」、「② 子育て相談」、「③ 未就園の親子への支援」について活動の実施の有無とその内容、また、実施あるいは実施していない理由、活動の頻度や園としての見解について問う項目によって作成され、その結果、136園から回答を得ることができた（回収率：67.0%）。子育て支援における各活動の実施率はそれぞれ73.5%、61.0%、62.5%であり、大分県においても、全国状況と同様に取り組みが進み、それぞれの活動によって差はあるものの定着しつつあることが分かった。

一方で、特に地域に密着した公立の幼稚園では、他園や行政などの他機関との関係から園独自の取り組みではなく、他機関との役割分担の中でできることを行っている実態があることがわかった。すべてを幼稚園単独で行うのではなく、地域の中で幼児教育の一つの資源として役割を担うというあり方も大分県の実態からは必要であるとしている。

2. 目的

幼稚園に在籍する幼児をもつ保護者は実際にはどのような子育てにおける悩みをもっているのでしょうか。そして、幼稚園に対してどのような子育て相談を望んでいるのでしょうか。本研究では、菊池⁴⁾が別府市内幼稚園5園の保護者に対して行った子育て支援に関する質問紙調査の結果を再分析することにより、これからの幼稚園における子育て相談のあり方を明らかにすることを目的とする。

3. 方法

菊池⁴⁾の研究の概要は次のとおりである。

まず、幼稚園における子育て支援に関する質問紙を作成した。作成にあたっては、斎藤・星・遊佐・佐藤・深倉⁵⁾及び荒牧・安藤・岩藤・丹羽・立石・砂上・堀越・無藤⁶⁾の質問紙を参考に作成した。

次に、本研究の実施を承諾してくれた別府市内幼稚園5園（公立幼稚園：3園、私立幼稚園2園）をとおして保護者に質問紙を配布し、一週間程度の期間をおいて園で回収した。

今回の本研究で考察の対象とする設問は次のとおりである。

1. 子育てについて相談したい内容は、どんな内容ですか。次の中から該当するものの記号に○を付けてください。（複数回答可）
さらに、相談したい内容について具体的に記入できる方は、各選択肢の下にある空欄に具体的にご記入ください。
- ア. 園での生活について
（例：給食をきちんと食べているか。お昼寝がきちんとできているか。）
- イ. 子どもの友だち関係について
（例：一緒に遊ぶ友だちがいない。友だちと仲良く遊べない。）

- ウ. 子どものしつけ
（例：言うことを聞いてくれない。叱り方に戸惑う。）
- エ. 子どもの教育
（例：子どもの教育にお金がかかる。自分の教育の仕方に自信が持てない。）
- オ. 他の保護者との関係
（例：他の保護者との付き合いが難しい。付き合い方がわからない。）
- カ. PTA や役員活動
（例：PTA や役員活動の仕事が多い。いつも自分がやっているような気がする。）
- キ. その他
 2. あなたは、このような悩みを、どなたに相談したいと考えますか。（複数回答可）
 - ア. 夫婦
 - イ. 自分の親
 - ウ. 同じ幼稚園の保護者
 - エ. 友人
 - オ. 幼稚園の先生
 3. （本研究では対象としない）
 4. あなたは、どのような方法で相談したいと考えますか。（複数回答可）
また、選択肢以外で相談したい方法がありましたら、「カ. その他」の欄に記入してください。
 - ア. 登園・降園時に
 - イ. 保護者会や懇談会で
 - ウ. 連絡帳で
 - エ. 電話で
 - オ. 個人面談で
 - カ. その他具体的にお書きください。
 5. （本研究では対象としない）

4. 結果

幼稚園5園の252名の保護者（公立幼稚園77名，私立幼稚園175名）から回答を得ることができた。

(1) 子育てについて相談したい内容

子育てについて相談したい内容として、最も多かったものは、「園での生活について」（54.0%）であった。次に「子どもの友だち関係について」（51.6%）、「子どものしつけ」（46.0%）の順であった。このように、子どもに関しての相談内容が多いのに対して、「他の保護者との関係」（11.1%）「PTA や役員活動」（6.0%）など、保護者自身に関する悩みについての相談は比較的少なかった。

結果を図1に示す。数字は全保護者に対する回答した保護者の割合である（複数回答）。

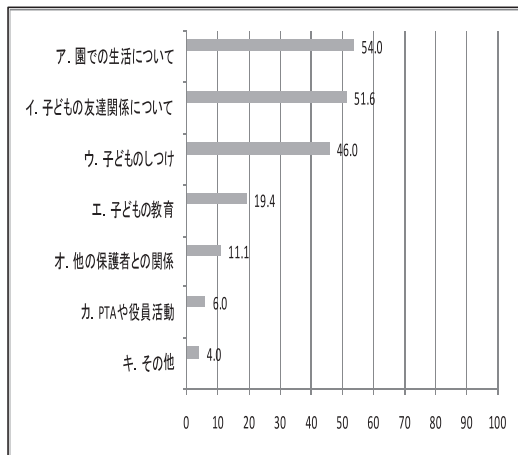


図1 子育てについて相談したい内容

次に、設問1の各選択肢における自由記述欄については、KJ法⁷⁾を用いて、分析を行なった。

自由記述欄に記述された内容をカード化し、幼稚園教諭免許状を所有する3名で協議を行い、カードをグルーピングし、各グループに名称を付けることで分類項目を設定した。カードは404枚得られた。分類項目は、各質問項目ごとに3～11の分類項目が得られた。

各分類項目のカードの数を表1に示す。

表1 分類項目別のカード数

回答項目	分類項目	数	
ア. 園での生活	給食のこと	34	
	集団行動	23	
	遊びのこと	13	
	友だちとの関係	10	
	身の回りのこと	8	
	排泄のこと	8	
	先生の指示に従うこと	8	
	楽しい時間	7	
	自己の主張	5	
	満足感	2	
	その他	12	
イ. 子どもの友だち関係	友だちとの関わり	36	
	子どもの姿や願い	29	
	集団行動	4	
	けんか	3	
	先生への願い	3	
ウ. 子どものしつけ	叱り方・なだめ方	37	
	感情的になる	20	
	言うことをきかない	10	
	社会性	8	
	繰り返す	4	
	兄弟関係	4	
	言葉遣い	3	
	甘える	3	
	その他	3	
	エ. 子どもの教育	習い事	11
金銭面		8	
自分の教育に自信がない		4	
遊べる環境づくり		4	
叱り方		2	
教育方針の違い		2	
その他		10	
オ. 他の保護者との関係		よい関係をもてない	11
		よい関係をもてる	6
		付き合い方がわからない	4
	交流の場	4	
	子育て	3	
	その他	3	
カ. PTAや役員活動	役員は負担である	6	
	子どものためになる	2	
	その他	12	
キ. その他	子育て	5	
	様々な場面での接し方	4	
	満足している	3	
	保育時間外での預かり	2	
	その他	1	

(2) 子育て相談の相手

子育てについて誰に相談したいかについて、最も多かったものは「夫婦」「幼稚園の先生」(71.0%)であった。次に「友人」(48.8%)「同じ幼稚園の保護者」(48.0%)の順であった。

結果を図2に示す。数字は全保護者に対する回答した保護者の割合である(複数回答)。

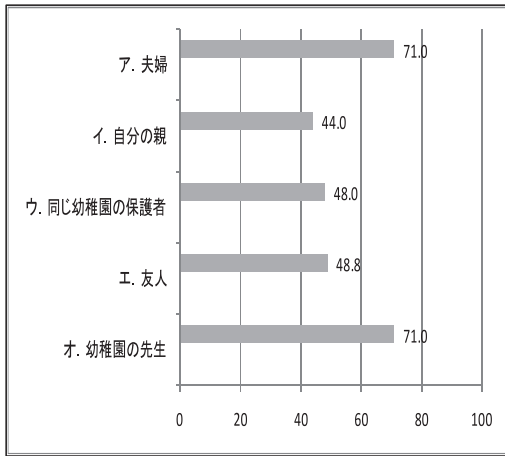


図2 子育て相談の相手

(3) 子育て相談の方法

どのような方法で相談したいかについて最も多かったものは「個人面談」(38.1%)であった。次に「登園・降園時に」(31.7%)「連絡帳で」(31.3%)であった。

結果を図3に示す。数字は全保護者に対する回答した保護者の割合である(複数回答)。

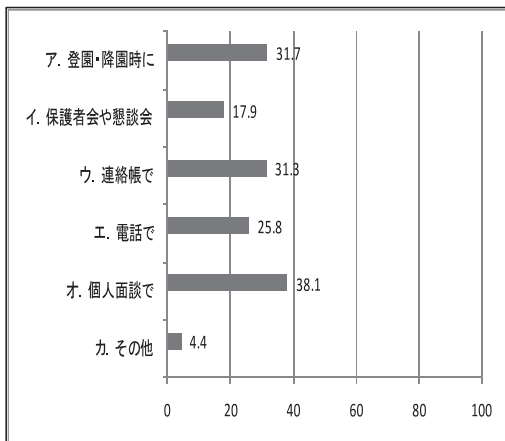


図3 子育て相談の方法

5. 考察

(1) 子育てについて相談したい内容

荒牧ら⁶⁾では、2005年に全国の幼稚園46園の4543名の保護者を対象に幼稚園における子育て支援の利用状況の調査を行なっている。その調査では、本研究と同様に子育て相談について、どのようなことを相談したのか、その内容について複数回答を求めている。

回答項目は全て同じではないが、「園での生活について」「子どもの友だち関係について」「子どものしつけ」「子どもの教育」「他の保護者との関係」「PTA や役員活動」の順番は同じであった。

今回の調査は、別府市内の幼稚園の保護者のみを対象としたが、6年経過した現在でも、当時の全国調査と今回の調査では保護者の相談したい内容について大きな変化はなかった。

次に、回答項目の自由記述欄について、KJ法で得ることができた各カテゴリーの中でカードの数が20枚以上のものを取り上げて考察する。

まず、回答項目「ア. 園での生活について」では、分類項目「給食のこと」が多かった。これは、アンケート調査の設問1の自由記述欄の回答例に“給食をきちんと食べているか”と具体例を提示したために、このような回答が多く見られたということが考えられる。ただ、食べるということは子どもの生活ではとても大切なことだという意識もあることも考えられる。次に同回答項目の分類項目「集団行動」が多かった。これは、家庭では多くても3人程度のきょうだいで生活するが、幼稚園では何十人という大勢の集団の中で共に過ごさなければならない。保護者は家庭での様子は把握しているが、幼稚園での子どもの様子のおおよそは理解できているだろうが、実際に自分の子どもが集団の中でどのように過ごしているかを具体的には知ることができていないと考えられる。

回答項目「イ. 子どもの友だち関係について」では分類項目「友達との関わり」が多かった。

これは、「ア. 園での生活について」の分類項目「集団行動」と同様に、家庭では少数の子ども同士の関わりについては知っているが、幼稚園生活の集団での関わりまでは把握できていないためであろう。自分の子どもは他の子どもに対してどのように接しているのか、自分の子どもは他の子どもに迷惑をかけていないだろうかなど子ども同士の関わり方について知りたいと思っている保護者の意見が多く見られた。

次に同回答項目では分類項目「子どもの姿・願い」が多かった。“友達に対して自分の意見を言えているか”“1人でポツンとしていないか”“友だちが居るのが”など、幼稚園での自分の子どもの友だちとの関わりについて知らない・気になっている保護者の様子が見受けられる。担任の先生から、自分の子どもについてあまり情報を得られていないのか。また、少数意見で“気の合う友だちを見つけてほしい”という自分の子どもに対しての願いの意見もあった。

回答項目「ウ. 子どものしつけについて」では分類項目「感情的になる」が多かった。“気をつけてはいるが、つい感情的になってしまう”“叱った後に叱りすぎたと反省する”といったように、叱った後に反省するということは、保護者の身近なところに手本となる人がいないことや、一緒になって子どもを叱ってくれるような人が居ないため、自分のしつけの仕方について不安を抱えてしまっているのではないだろうか。

同回答項目では分類項目「叱り方・なだめ方」も多かった。“叱り方やほめ方を知りたい”“どのように対応したらよいか”“叱り方が分からない”など子どもが悪いことをしたとき、年齢相応の、どのような言葉で言い聞かせればいいのかなど、なだめ方の方法が分からないという意見が多く見られた。

(2) 子育て相談の相手

子育ての相談相手として「夫婦」と「幼稚園の先生」が同数で最も多かった。子育てについて夫婦間で相談するのが多いのはある程度予想

できることではあるが、「幼稚園の先生」がそれと同数であったということは、子育てに関わって専門性のある人に悩みを相談することで、悩みを解決させたいという思いがあるのではないかと考えることができる

(3) 子育て相談の方法

「個人面談」「登園・降園時」「連絡帳」が多いのは、他の保護者の前でおおっぴらにというよりも、幼稚園の先生と個人的に話をしたいとみてとれる。「登園・降園時に」「連絡帳で」が多いのは予想されていたが、「個人面談」が多いのは、保護者が子どもについて1対1で、真剣にじっくりと相談したいと考えているからではないかと考えられる。

荒牧ら⁶⁾では、子育てについての悩みを相談する際の利用状況を調査している。この調査によれば、最も多かったものは「送り迎え」の時であった。続いて、「保護者会・懇談会で」「連絡帳で」が多かった。一方で、「電話で」や「予約をして」は、少数派であった。

荒牧ら⁶⁾では「保護者会・懇談会」が2番目に多く、一方本調査では同回答項目は5番目と少数派であった。これは、それぞれのアンケート調査において、保護者への質問の仕方が荒牧ら⁶⁾では「どのような状況で」と質問しているのに対し、本調査では「どのような方法で」と質問していることから、異なった結果になったと思われる。この回答項目を除けば、概ね同様の結果が得られたといえる。

(4) 総合考察

子ども自身に関しては幼稚園という集団生活の中で、自分の子どもはどのように過ごしているのか、友だちとはどのように関わっているのかなどの子どもの社会性の育ちがあるとわかった。保護者自身に関しては、年齢相応の叱り方・なだめ方の方法がわからないということが中心であった。

子育てについての悩みを相談する相手としては、夫婦と同等に幼稚園の担任教師への期待が大きかった。相談の手段としては個人面談が最

も多く、子育てについての相談を1対1で、しっかりと真剣に相談したいという保護者が多かった。これらの結果は、先行研究における調査の結果^{5), 6)}と大きく異なることはなかった。

一方、大分県の幼稚園における子育て支援の実態調査を行った佐藤ら³⁾によれば、子育て相談については、「特に、場所や時間を設けず、登園降園時、参観日など日常的な保護者との関わりの中で、子育て相談に応じているのが実態であり、この延長として子育て相談という活動が位置づけられていると考えられた」とし、「また、相談担当者は園の教員が担っているが、助言者として専門家を活用している園が4割に上った。特別な支援のある子どもへの対応など幼稚園教育の専門性だけでは対応が困難になっている現状も推測される」と述べている。さらに今後の課題として子育て支援の質の充実を挙げており、子育て相談においてもそれは変わらないとしている。

幼稚園における子育て相談は、飯長⁸⁾によれば「親子の日常に関する、非相談専門家による、非相談機関における日常場面での援助」である。保育所保育指針⁹⁾では「子育て等に関する相談や助言に当たっては、保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者一人一人の自己決定を尊重すること」とある。ここには「受容」と「共感」によるカウンセリングマインドと自己決定の尊重が述べられているが、「非相談専門家」である幼稚園教諭が、高度に専門的なカウンセリングマインドによる相談を行うことは容易なことではない。むしろ形式的で矮小化されたカウンセリング的対応になりがちである。

岩藤・立石・安藤・荒牧・丹羽・砂上・堀越・無藤¹⁰⁾は幼稚園における子育て相談に焦点をあて、利用者の特徴、利用の評価と精神的健康との関連性、そして、園の相談形態と保護者の精神的健康との関連性について検討している。その結果、園の相談形態が外部からの専門家によるコンサルテーション等を受けている園において、主としてグループ相談を行っている園よりも保護者の自尊感情が有意に高いことを

報告している。「相談専門家」がコンサルテーターとして加わっていることで、幼稚園教諭に自信と安心を与え、保護者や子どもにゆとりをもって対応でき、幼稚園教諭の保護者に対する関わりや対応の向上があるからではないかと考察している。

幼稚園に在籍する幼児をもつ保護者の子育てについて相談したい内容の中心は、幼稚園における子どもの普段の姿を知りたい、そして、年齢相応の子どもへの声かけをはじめとする接し方を相談したいということであった。幼稚園における子育て相談は、まずは子どもの日常の姿を中心にして、幼稚園での具体的な保育を知らせることが基本となるということである。幼稚園では、当然、さまざまな機会をとらえて、日常の子どもの姿や成長・発達を伝えてはいるが、保護者には十分に伝わっていないことではないだろうか。これからは、子どもの姿や成長・発達が分かるような伝え方を工夫することが必要なのではないか。さまざまな工夫をすることにより、幼稚園における子どもの姿を伝えるとともに、具体的な保育を見てもらうことが必要だと考えられる。これが幼稚園教諭の専門性を活かした子育て相談であろう。保護者に日常的に開かれた保育を目指すことが、子育て相談の基本となると考えることができる。

次に、「相談専門家」とともに行う子育て相談が必要となってきたといえる。「相談専門家」にすべてを任せるのではなく、「相談専門家」とともに子育て相談を行うことで、「非相談専門家」である幼稚園教諭の相談技量の向上を図ることができ、子育て相談の質が充実することにつながるであろう。

6. 結論

本研究は、これからの幼稚園における子育て相談のあり方を明らかにすることを目的として行われた。そのために、菊池⁴⁾が行った別府市内幼稚園の保護者に対しての子育て支援に関する質問紙調査からの結果を再分析するとともに、佐藤ら³⁾が行った大分県内の幼稚園の子育

て支援に関する実態調査の結果から考察を行った。

その結果、幼稚園に在籍する幼児をもつ保護者の子育てについて相談したい内容の中心は、幼稚園における子どもの普段の姿を知りたい、そして、年齢相応の子どもへの声かけをはじめとする接し方を相談したいということであった。

そこで、飯長⁸⁾、岩藤ら⁹⁾、佐藤ら³⁾から、今後の幼稚園における子育て相談のあり方として、次の2点を指摘した。

一つめは、子どもの日常の姿を中心にして、幼稚園での具体的な保育を知らせることが基本となるということである。日常の子どもの姿や成長・発達を分かりやすく伝えることが不足しているということである。そして、具体的な保育を見てもらうのである。これが幼稚園教諭の専門性を活かした子育て相談であろう。

二つめは、「相談専門家」とともに行う子育て相談が必要ということである。「相談専門家」にすべてを任せるのではなく、「相談専門家」とともに子育て相談を行うことで、「非相談専門家」である幼稚園教諭の相談技量の向上を図ることができ、子育て相談の質が充実することにつながるであろう。

地域における子ども・子育て支援の充実は、認定子ども園の拡充とともに、「社会保障・税の一体改革」における「3党合意」によっても、今以上に謳われており、その具体策として利用者支援、子育て支援拠点事業が挙げられている。これは幼稚園における子育て相談の充実と軌を一にしている。「気になる子ども」や「配慮が必要な子ども」が増えていると言われている現状があることも併せて考えると、今後はなお一層の子育て相談の質の向上が求められているといえる。

【引用文献】

- 1) 文部科学省, 幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集, 2009.
- 2) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説(平成20年10

月), 2008, フレーベル館.

- 3) 佐藤慶子・阿部敬信・高濱正文, 大分県の幼稚園における子育て支援に関する研究, 別府大学短期大学部紀要, 31, 2012, 9-22.
- 4) 菊池香奈恵, 保護者が求める子育て支援の在り方-子育て相談に焦点を当てて-, 平成23年度別府大学短期大学部専攻科初等教育専攻修了論文集, 2012, 1-9.
- 5) 斎藤和代・星俊子・遊佐早苗・佐藤久美子・深倉和明, 福島大学附属幼稚園「子育て支援事業」活動について, 福島大学総合教育研究センター紀要, 6, 2009, 49-56.
- 6) 荒牧美佐子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さかの・立石陽子・砂上史子・堀越紀香・無藤隆, 幼稚園における子育て支援の利用状況(第2報)お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 200, 69-16.
- 7) 川喜田二郎, 発想法-創造性開発のために, 1967, 中公新書.
- 8) 飯長喜一郎, 子育て支援における相談のあり方, 家庭教育研究所紀要, 23, 2001, 29-35.
- 9) 厚生労働省, 保育所保育指針(平成20年告示), 2008, フレーベル館.
- 10) 岩藤裕美・立石陽子・安藤智子・荒牧美佐子・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香・無藤隆, 幼稚園における子育て支援: 幼稚園における「子育て相談」の形態と保護者の精神的健康との関連から, お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 2007, 4, 27-34.